

室町幕府の創設

執筆・講師
楠木 武

学習のねらい

後醍醐天皇の討幕計画が引き金となって、鎌倉幕府は滅亡する。その後、建武の新政が始まるが短期間で崩壊し、室町幕府が創設される。ところが、この後、約60年間にわたり内乱の時代が続く。新しい政権ができたのに、どうして内乱が続いたのだろうか。また、そのような中で形成されていった室町幕府とは、どのような特徴を持つ組織だったのだろうか。

鎌倉幕府の滅亡

幕府で得宗による専制政治が御家人の反発をまねいていたころ、天皇家は持明院統と^{だいかくし}大覚寺統に分かれ、皇位継承などをめぐって対立を深めていた。そこで1317年、幕府は、両統から交互に天皇を出すという妥協策によって調停をはかった。翌年、大覚寺統から即位した後醍醐天皇は、天皇親政を復活させて朝廷の権限強化をめざし、諸国の反幕府勢力を結集して討幕を計画するが、二度の失敗の末、1332年に^{おき}隠岐に流された。

しかし、河内の^{かわち}楠木正成が^{くすのきまさしげ}挙兵し、後醍醐天皇が^{おき}隠岐を脱出するなど反幕府勢力の動きが活発化すると、討幕の気運は一気に高まった。有力御家人の^{あしかがたかうじ}足利高氏（のち^{たかうじ}尊氏）は幕府に背いて京都の^{ろくは}六波羅探題を攻め落とし、^{にった よしさだ}新田義貞も鎌倉を攻撃して得宗の^{ほうじょうたかとき}北条高時らを自害させた。こうして1333年、鎌倉幕府は滅亡した。

京都に戻った後醍醐天皇は建武の新政を開始し、幕府も院政も摂政・関白も否定して天皇への権限集中をはかり、土地所有権の確認はすべて天皇が行うと定めた。ところが、恩賞が公家や寺社にかたより、武士社会の先例や慣習が無視されたため、多くの武士は不満を抱き、幕府の再興を期待するようになった。政務の停滞や社会の混乱により、新政権への信頼は急速に失われていった。

南北朝の内乱

1335年、北条氏の残党を鎮圧するために下った鎌倉で、足利尊氏は新政権から離反した。翌年、京都に攻め上りいったん九州に敗走したが、^{みなとがわ}湊川の戦いで新田義貞や楠木正成らを破り京都を制圧した。尊氏は持明院統の^{こうみょう}光明天皇を立て、当面の政治方針として建武式目^{けんむしきもく}を発表した。一方、後醍醐天皇は京都を脱出して吉野にこもり、依然として自らが正統な天皇の地位に

あることを主張した。ここに建武の新政は崩壊し、吉野の南朝（大覚寺統）と京都の北朝（持明院統）という二つに朝廷が分裂する事態となった。

1338年、尊氏は北朝から征夷大將軍に任ぜられ、室町幕府を開いた。しかし、軍事面を尊氏、司法・行政面を弟の直義が担当したため権力が二分し、ついに観応の擾乱という全国的争乱に発展した。直義が尊氏に毒殺された後も争乱は続き、両派はそれぞれ相手を討つため状況に応じて南朝とも結んだ。

このころ武士団では、分割相統に基づく惣領制が崩れて単独相統が一般化したため、一族内部で嫡子と庶子が抗争を繰り返していた。一方が守護など有力武士の家臣になると、相手方も別の有力武士と結んで対抗した。これによって、血縁ではなく地縁で結びつく新しい武士団が生まれた。またこの抗争は、足利兄弟の対立や南北両朝の対立とも結びついたため複雑化し、南北朝の内乱が長期化・全国化する要因となった。

室町幕府の確立

動乱の中、地方を抑えるために大きな役割を担うことになったのが守護である。幕府は守護の権限を拡大し、荘園の年貢の半分を兵糧米として調達する半済の権利も認めた。守護はその力が強まるにつれて、荘園領主から年貢の徴収を請け負う守護請を行うなど、地域の支配権をいっそう強化した。このように任国全域を自分の所領のように支配する室町時代の守護を、鎌倉時代の守護と区別して守護大名と呼ぶこともある。

1368年に足利義満が3代將軍に就任するころには、幕府の体制もしだいに安定をみせはじめ、組織も整備された。將軍を補佐する管領は、斯波・細川・畠山の3家（三管領）から任命され、京都の警備や刑事訴訟を担当する侍所の長官は、赤松・一色・山名・京極の4家（四職）から任命された。三管領・四職を中心とする有力守護は、在京して重要政務を決定し、幕府の運営にあたった。在京する守護の代わりに、任国には守護代がおかれた。

1378年、義満は京都の室町に「花の御所」と呼ばれる邸宅を建てて幕府を移した。これが「室町幕府」という呼称の由来である。室町幕府体制の安定を背景に、1392年、南朝の後龜山天皇が北朝の後小松天皇に譲位するという形で、ついに南北朝の合一が実現した。